

立命館大学講師時代の高橋和巳

中国語学与中国文学の講義担当を中心に

田中 寛 (大東文化大学外国語学部)

Takahashi Kazumi in Days of the Lecturer at Ritsumeikan University:

Centering Around teaching Chinese Language and Chinese Literature

Hiroshi TANAKA

序

数種の高橋和巳年譜に拠れば高橋は昭和三五年四月から三九年十二月まで約五年間(1960-1964)、立命館大学文学部中国文学専攻の専任講師として勤めている。すでに京都大学大学院博士課程を修了した昭和三四年(一九五九年)に非常勤講師として勤めているが、翌年専任職採用への階段であった。二部(夜間部)の授業も担当した。教授会には殆ど出席せず、また梅原猛、白川静といった周囲の温かい理解や支援もあり講義の傍ら創作にも励んでいたと言われる。専任講師として採用されるにあたっては白川静教授の熱心な働きかけがあったとされるが、業績の一つに小説が提出されていたというからこれまた稀有なことである。恐らく自費出版した処女小説『捨子物語』(足立書房、一九五八年)であったと思われる。大らかな時代であっただろうし、何より採用選考委員を驚かせたのは彼の筆力であったにちがいない。すでに大学院生時代に岩波中国詩人選集15『李商隱』(一九五八年)の注釈書をものし、また恩師吉川幸次郎の愛弟子とあっては大学側としてこの俊英に対して諸手を挙げて歓迎したことが窺われる。すでに高橋の若き才能は京都の学術界においては周知の情報であったようである。戦時下の廃墟の体験は未だ癒されることは

なかったが、京都の自由な学問的風土は彼を奮い立たせる豊饒な土壌を限りなく有していた。

ところで、作家の文学的出発はどのようにして醸成されるのだろうか。また創作と研究の鼎立、並走はいかにして可能であろうか。その言語的、思想的基盤はその後、どのように発展していくものなのか。高橋和巳は研究、批評、創作、翻訳をまさに四輪駆動のごとく駆使して全体知の吸収・研鑽にとめたが、小文は高橋和巳の初期の文学的、学問的営為を再検証する一環として、立命館大学講師時代に焦点を当てつつ、その才能の始源、彼の文学的出発とその展開をさぐる試みである¹⁾。

以下では主として立命館大学文学部紀要『立命館文学』に拠りつつ、彼の講師時代の足跡をたどってみたい。

「文学の責任」と文学的出発

処女評論集『文学の責任』は一九六三年五月、三三歳のときに初版が上梓された。新装版は一九六七年十一月に河出書房新社から刊行された²⁾。中国文学論の考察を含め、計一点一点の重厚な論考を収めるが、「あとがき」にはそれらの発表年代と掲載誌（初出）が若い順に記されている。京都大学大学院生から立命館大学講師時代にかけてであり、創作活動と並行しての旺盛な学術研究、評論活動の足跡を辿ることができる。

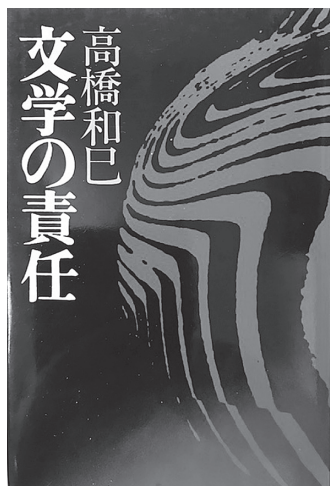
- | | | |
|-------|-------------|--------------|
| 一九五七年 | 「文学の責任」 | 『対話』第二号 |
| 一九五九年 | 「文学研究の諸問題Ⅰ」 | 『立命館文学』十二月号 |
| 一九六〇年 | 「表現者の態度Ⅰ・Ⅱ」 | 『視界』第一号・第二号 |
| | 「顔延之の文学」 | 『立命館文学』六月号 |
| | 「文学研究の諸問題Ⅱ」 | 『立命館文学』十月号 |
| 一九六一年 | 「逸脱の論理」 | 『近代文学』三・四月号 |
| | 「自立の精神」 | 『思想の科学』五・六月号 |
| | 「非暴力の幻影と栄光」 | 『思想の科学』七月号 |
| | 「中国の物語詩」 | 『無限』夏季号 |
| | 「文学研究の諸問題Ⅱ」 | 『立命館文学』八月号 |
| 一九六二年 | 「葛藤の人間の哲学」 | 『思想』十一月号 |



図(1) 中国詩人選集第二集13(一九六二)



図(2) 編著による漢詩鑑賞入門(一九六二)



図(3) 『新装版 文学の責任』(新装版一九六七)

ちなみに『視界』は杉本秀太郎ら京都大学大学院生を中心とした同人誌で、「表現者の態度Ⅰ」は副題が「司馬遷の發憤著書の説について」、Ⅱは副題が「職業としての文学の誕生」であった。「文学研究の諸問題Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の原題は「思想の動向」、「自立の精神」には副題「竹内好における魯迅精神」とあるが、原題は「竹内好論」であった。「中国の物語詩」は副題が「おもに「秋行」について」である。「葛藤の人間の哲学」は副題が「東洋思想における不服従の伝統」である。なべて副題を付す傾向があった。³⁾『対話』は小松左京らと始めた同人誌で、『視界』は京都大学人文科学研究所のメンバーとともに比較文学の研究成果としてまとめたものである。第一次戦後派が編集した『近代文学』に掲載された「逸脱の論理——埴谷雄高論」はすでに埴谷雄高のもとを訪れ、その後本人に書き送ったものが掲載されたものである。三十歳にして書かれた論考は数多い埴谷雄高論の中でも今なお質の高さを誇っている。『思想の科学』にはおそらくこれも京大人文研のメンバー、とくに桑原武夫らの徳恵によるものであろう。『無限』も同人誌であったが、創刊号しか出されなかった。「葛藤の人間の哲学」はやくも高橋自身の精神的営為を象徴する論考であるが、三十一歳の若さで第一級の学術評論誌に掲載された。まさに高橋和巳の文学的出発がここに出そろった感がある。⁴⁾

同一九六二年に『悲の器』が河出書房第一回文藝賞長篇部門を受賞し、華々しく文壇にデビューすることになったことはよく知られているが、それ以前にかくも熱心に思想的鍛錬に励んでいたことに感嘆を禁じ得ない。いずれも高橋和巳独特の生硬な文体、難解な語彙・表現を駆使して思想、評論の独自のスタイルを構築しようとした気概が存分に伝わってくる。各篇は単行本にまとめるにあたって、僅かの字句修正の他はほぼ初出通りである。

一方、着任早々に『立命館文学』に中国文学の論文が掲載されている。「顔延之の文学」は博士論文の一部である。すでに卒業論文と修士論文は京都大学文学部中国文学紀要『中国文学報』に掲載されていたが、中国文学の研究論文は後にもこの一本のみであった。

このほか、中国詩人選集二集(13)として次の一冊が刊行された。

『王子禎―王漁洋―』岩波書店 一九六二年(図1)

本シリーズは吉川幸次郎、小川環樹の編集・校閲により京大中文系を中心とする選集であった。また中国詩については同時期に次の共著も刊行されている。多くが大学院生時代の研鑽によるものと思われる。創元手帖文庫の一冊として出された。

高木正一・武部利男・高橋和巳著『漢詩鑑賞入門』創元社 一九六二年(図2)

高橋は第一部「中国詩の歴史とその形式」の「中国詩史梗概」のほか、第二部「中国編」のうち六朝以前の中国詩三十余詩を精選している。各詩人の詩原文訳と訳注、人物紹介にも高橋独自の鑑賞眼がうかがわれる。なお、中国詩史梗概には次のような終結部分があるが、〈新民歌〉もまた「一部選ばれたる人々の独占物であつてはならない」としても、相応に党の指導方針に沿ったものであり、現実との齟齬はいなめない。

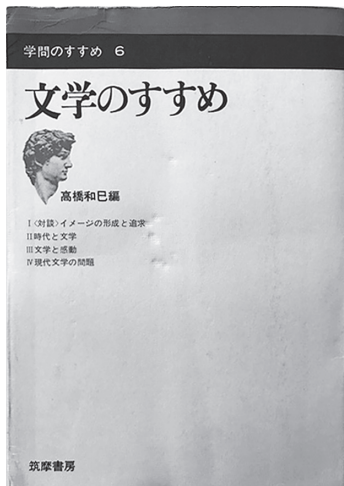
一九四九年の中華人民共和国の成立後は、長篇叙事詩の試みがまず目立ち、次に非専門作家の作品、いわゆる〈新民歌〉が各地方の文化局で大量に編纂、出版され、いまも出版され続けている。それは文学、そして他の文化的な作業もまた、一部の選ばれたる人々の独占物であつてはならないという共産党の指導方針によるものだが、考えてみれば「詩経」にはじまった中国の詩の歴史は、あらたな相貌のもとに、再び新しい「詩経」の時代へと大きく回帰しつつあるといえよう。(二九頁)

これはまた、当時知識人の中国に寄せる期待感の表れでもあつた。着任二年目に『悲の器』により河出書房文藝賞を受賞しているが、同時に『憂鬱なる党派』の完成、また長篇『邪宗門』の執筆にも取り掛かった時期であつた。この時にすでに「全方位」的知が、彼の創作を幾重にも囲繞していた。三十代に入って飛ぶ鳥を落とすかのような成果を次々と遺した時期である。質量ともにまさに超人的であつたが、その土壤には京都学派の知の山脈、人脈が深く根を下ろしていたのである。

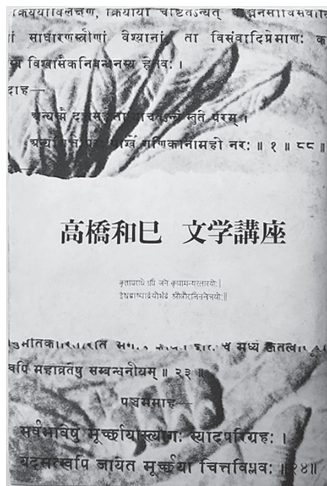
『文学講座』にみる文学観の構築

時代の寵児として登場した高橋和巳に白羽の矢が立った。テレビ大学講座の講師としての依頼である。九回にわたって放映されたが、「文学の責

図(5) 『文学のすすめ』(一九六八)



図(4) 没後五周年に刊行された『文学講座』(一九七六)



任」以後の展開とともに、高橋の文学観を語る上で見逃せない記録であるが、管見のかぎりでは映像、音源の所在は不明である。今では、没後五周年の一九七六年四月に刊行された『文学講座』(図(4))によって所在を知るのみである。

大学在職五年目にして、すでに作家活動も軌道に乗り、学術研究よりも創作に軸足を置いた感があるが、この時期から大学の講義はしばしば休講も発生し、辞職のことも脳裏をよぎっていた頃と思われる。こうした活動は大学の教学の職務と並行しての準備作業も含め、相当無理を強いられていたのではないかと推察される。この時期からほとんど講義を担当していなかったというが、現代ではある意味では職務放棄に近い状況であったようである。立命館大学人文科学研究所と読売テレビ放送との共同企画になるテレビ大学講座のなかの「文学思想史」講義として九回にわたり放送された。目次は次のようである。ありていの文学講座ではないことが一見して了解される。最初の演題は「文学と運命」であった。何とも高橋和巳らしい志向性がうかがわれるのだが、一連の講座内容には彼の文学観が浮き彫りにされている。

- 第一回 文学と運命 一九六四年九月七日放送
- 第二回 文学と自然 一九六四年九月十四日放送
- 第三回 文学と宗教 一九六四年九月二十一日放送
- 第四回 文学と愛 一九六四年九月二十八日放送
- 第五回 文学と社会 一九六四年十月五日放送
- 第六回 文学と心理 一九六四年十月十二日放送
- 第七回 ユートピア文学 一九六四年十月十九日放送
- 第八回 文学と政治 一九六四年十月二十六日放送
- 第九回 現代日本文学の問題 一九六四年十一月二日放送

これに先立つ前年の一九六三年秋に放送された立命館大学人文科学研究所と読売テレビ放送との共同企画になるテレビ大学講座「現代小説の課題」講義として五回にわたって放送されたものがある。これらの原稿内容と、翌年の講座内容との相関、発展についてはさらに関心がもたれる

が、創作、研究、批評、翻訳の統括的作業を果敢に進めた形跡がうかがわれる。

- | | | | |
|-----|-------------|-------------|----|
| 第一回 | 現代小説の概観 | 一九六三年十月十二日 | 放送 |
| 第二回 | 転向者の文学と近代志向 | 一九六三年十月十九日 | 放送 |
| 第三回 | 戦争体験と文学 | 一九六三年十月二十六日 | 放送 |
| 第四回 | 日常尊重と自己破壊 | 一九六三年十一月二日 | 放送 |
| 第五回 | 美と悪と性 | 一九六三年十一月九日 | 放送 |

これらの講座への企画参加は、長篇『悲の器』の完成直後になされているもので、高橋の文学観をそのまま顕現しているとみて差し支えない。高橋はのちに『文学のすすめ』(図⑤)というアンソロジーを編んでいるが、文学を総体的に把握しようとした営為が如実に見てとれる。ひとり作家がこうした壮大な志をいだいて〈学問のすすめ〉に倣うかのように〈文学のすすめ〉を説く姿勢は、まさに彼の〈表現者の態度〉であった。なお、『文学のすすめ』はシリーズの一冊として編まれたものだが、当代の円熟味の増した作家を配置した類まれな文学への招待書であり、時代感を彷彿とさせる。冒頭に大江健三郎「想像力の根源」、野間宏「想像力の解放と人間の解放」、埴谷雄高「夢と想像力」へのインタビューのほか、平井啓之、秋山駿、作田啓一、柴田翔、真継伸彦、飯島耕一、小松左京といった文学者、作家が時代の危機感を察した論考を寄せている。高橋かうみは全体の編集とともに、「現代思想と文学」を執筆している。六十年代の一つの成果であった。なお、高橋の編著の文学評論としてはもう一冊、『戦後文学の思想』(戦後日本思想体系13、筑摩書房 一九六九)がある。

中国文学専攻における担当科目

高橋和巳が『立命館文学』の裏表紙中に「立命館文学」役員として名を連ねるのは専任教員として着任した昭和三十五年四月号(第一七九号)からである⁵⁾。どの大学の組織でもおそそうであるように、こうした文学会には専任教員は全員が役員の資格を有していた。以来、明治大学に文学部助教として移る(一九六五年一月)まで続いている。当時は会長を平中荅次、青木正兒、梅原猛、白川静、奈良本辰也、林屋辰三郎、船山信一、和田繁太郎、西川富雄、三田村泰助などといった錚々たる顔ぶれの名前がある。筆者が入学した昭和四十五年当時もそのメンバーの多くが在職されていたが、当時の文学部は充実した教授陣をそなえていたことがわかる。この時代は文学部には哲学科、文学科、史学科、地理学科があ

り、哲学科は心理学専攻と哲学専攻があり、文学科には日本文学専攻、中国文学専攻、英米文学専攻が、史学科には日本史学専攻、東洋史学専攻、西洋史学専攻があった。文学部としては教育学科(専攻)をのぞけば質量ともに充実していたといえよう。

昭和三十五年度立命館大学文学部講義題目が冊子の巻末に掲載されているが、高橋は専門科目と語学科目を担当している(濃字)。今日の大学教員の担当コマ数からいえば少なく、さらに学務業務も少なめであったようである。

中国文学史Ⅰ 先秦より漢代 教授 白川静

同 Ⅱ 六朝及び随唐 教授 高木正一

中国文学概論 教授 高木正一

中国文学特殊講義Ⅰ

一部「近世文人生活各論」 教授 青木正児

二部「文学作品の校勘と鑑賞」 講師 尾崎雄二郎

中国文学特殊講義Ⅱ

唐代詩人及びその作品研究 教授 高木正一

中国文学演習Ⅰ 経学歴史 教授 白川静

同 Ⅱ 古代眞寶前集 教授 橋本循

中国文学講読Ⅰ 古代眞寶後集 教授 白川静

同 Ⅱ 史記會注考証 教授 高木正一

中国語学概論 専任講師 高橋和巳

中国語学特殊講義

一部 漢字字体変遷史 講師 尾崎雄二郎

二部 中国古典修辭学入門 専任講師 高橋和巳

中国哲学史 教授 笠原伸二

中国哲学特殊講義

「マコト」と訓まれる漢字の研究 教授 笠原伸二

中国学研究法

教授 笠原伸二

ここで専任講師というのは専任職であり、講師は非常勤講師で他大学の専任講師、助教授、教授を一律に称する。高橋和巳は文学部中国文学専攻専任講師として漢詩、現代中国語の双方を担当した。語学では以下のような記載がある。

一回生 初級A 倉石中国語教本(巻二)

初級B 北京大学外国留学生漢語専修班編

中級A 倉石中国語教本(巻二)

中級B 丁玲「我在霞村的時候」

次年度(昭和三十六年)では同様の科目を担当しているが、内容に変動がある。

中国語学概論

専任講師 高橋和巳

中国語学特殊講義

中国現代語文の諸問題*

専任講師 高橋和巳

中国語

初級 倉石中国語教本

専任講師 高橋和巳

中級 老舍「龍鬚溝」

専任講師 高橋和巳

今回の調査では閲覧文献の制約により、この二年間の担当科目しか明らかにしえなかったが、できうれば全期間の担当科目調査を行いたい。また、同様に明治大学、京都大学在籍当時の担当科目についても調査がもとめられる。

当時の高橋の研究室は研心館、清心館等が密集する狭隘な広小路キャンパスから寺町通を五十メートルほど下がった京都御所寄りの梨木神社の

北側に位置する有心館にあった。有心館の名称は『詩経』小雅巧言の「他人有心、予忖度之」に拠るもので一九六一年に竣工、鉄筋コンクリート四階建ての堅牢な校舎で、主として少人数のゼミや外国語の授業に使われたのだが、高橋もこの有心館の小教室で中国語を教えていたはずである。一九七八年に閉じた広小路学舎は今では記念碑を遺して見る影もない。当時、高橋の講師時代はテーブルコーダーも十分になく、ましてネイティブの中国語教師など望むべくもなかったのだろう。高橋が学生時代に中国語を学んだ当時も同じような環境であったかと思われる。

高橋が中国語の授業で使用した倉石武四郎中国語教本は当時の中国語教育のバイオニア的存在で、周知のように日本の中国語教育史にあつては「急就篇」、「官話指南」を受けて中国語を初めて外国語教育として位置付けたものである。『倉石中国語教本巻一、巻二』は一九五〇年に弘文堂から出版された。倉石は戦前にも支那語教育の普及に努め、『倉石中等支那語巻一』（一九四〇）など多くの著作がある。一九五三年には『ラテン化新文字による中国語初級教本』が出されている。²⁾

このほか北京大学で使用されている留学生中国語教材をも使用しており、現代中国語の教学にも熱心であったことが窺われる。

着任四年目の昭和三八年（一九六三年）、つまり文壇デビューした翌年に朝日新聞の学芸欄にエッセイを書いている。⁶⁾例年の終戦記念の連載記事であるか、「若い日本の発言」と題して数名の若手研究者、批評者の意見を載せることになり、そのトップバッターとして高橋が抜擢された。⁶⁾彼は「政治と文学」という小文を書いたが、そこには以後の彼の文学との格闘の出發が記されている（傍点、引用者）。

文学は一定の政治目的に従属するものか。それとも独自の視点を固執することによって人類の文化史により多くの貢献をなすものなのか。従来いくたびかむしかえされた「政治と文学」の問題は、今後も現代文学のもっとも重大な課題として論じられ続けるだろう。（中略）

政治は現在にかかわる利害の営みであり調整であるゆえに、都合によって過去を没却することがあるとしても、文学者などが重大な視野脱落のまま事をうやむやにすまそうとするなら、私たちの道德は恥知らずの道德となり、私たちの文学は恥知らずの文学となりはてるだろう。

この言説は高橋和巳の一貫した思想主張であり、思想文学者の立脚点を如何なく示している。ただ、彼の言う「政治」とは一般に想起しがちな体制的なものよりはさらに広大で深淵なものを志向していたはずであった。今は「彼は政治的で」と揶揄するように、政治を狭義の宿痾と見なしたが故に、政治と生活、暮らしの乖離がますます遠くなってしまった感があるが、当時の時代感性として政治の中に暮らしがあったので、たとえば「貧乏人は麦飯を喰え」という池田首相の文言などは著しく当時の困窮層の響感をかっただのである。怒りの振幅にも径庭の感があった。ところで、今では紙面記事の末尾に執筆者の職業が記されるのであるが、颯爽と微笑む写真に「高橋氏」とあり、（作家）とある。立命館大学講師ではない。すでに彼は大学教員としてよりも作家としての自負、自意識があったのだろう。

なお、このエッセイの後段に戦時下の上田廣の作品「地燃ゆ」と丁玲「我在霞村的時候」の主人公が比較紹介されているが、この作品は中国語中級の読解教材として使用されていたことが分かる。またこの作品は中国語教材としても好評であったようで、邦訳が当時くしくも二種類同時期に出されていたことも記しておきたい。この二種類の訳書も高橋和巳文庫目録に見ることができる。講義科目に掲載されているように丁玲の教材を授業に用いたのもそうした関心の延長にあったものだろう。

- ・「霞村にいた時他六編」岡崎俊夫訳 岩波文庫 一九五六・一〇
- ・「我在霞村的時候——霞村にて——」相浦杲訳注 江南書院訳注双書5 江南書院 一九五六・一〇
- ・丁玲《太陽照在桑乾河上》北京・人民文学出版社 一九五四・一 8刷
- ・《丁玲短篇小説選集》北京・人民文学出版社 一九五四・九

高橋和巳の中国語学について

日本近代文学館には高橋和巳の生前に蒐集された文献が所蔵されており、その莫大な書籍は「知の巨人」を標榜するにふさわしく、古今東西の哲学、思想、文学にわたるさまざまな知の体系とその形成をくみ取ることができると思われるが、その中に一定の中国語学関連の文献を見出すことができる。中国語学では所蔵図書には次のようなものがある（文献目録の記載順）⁴。

- 『華語助動詞の研究』鳥居鶴美著 丹波・養徳社 一九四七・一〇
- 『華語要訣』宗内鴻著 三省堂 一九三八・二
- 『倉石中国語教本巻2』倉石武四郎編 弘文堂 一九五七・四
- 『支那言語学概説』王力著 佐藤三郎治訳 生活社 一九四〇・九
- 『支那国音字典十一版』宮原民平・土屋明治共編 文求堂 一九四六・九
- 『支那語発音入門』倉石武四郎著 弘文堂書房 一九四二・三
- 『中国語音韻学研究の手引』唐作藩編著 池田武雄 京都・京都府立大学中国文学研究室 一九六二・一〇
- 『中国語会話 入門から実用まで』長谷川寛 白水社 一九六三・一 三版

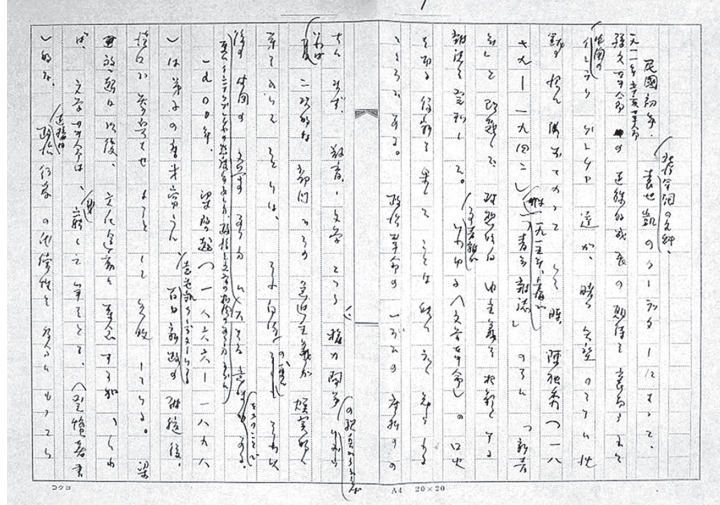
- 『中国語教科書 日本語版漢語教科書縮刷版上下巻』北京大学外国留学生中国語文専修班編 光生館 一九六一・六
- 『中国語辞典』鐘ヶ江信光著 大学書林 一九六〇・四
- 『中国語表現文型』大原信一著 大阪外国語大学中国研究会 一九四九・九 はしがき
- 『中国語文法講話』中国科学院言語研究所編 実藤恵秀・北浦藤郎訳 江南書院 一九五六・八
- 『中国語法学習』呂叔湘著 大原信一、伊地智善繼訳 江南書院 2刷 一九五六・三
- 『中国語文法』楊伯峻著 波多野太郎等訳 江南書院 一九五六・八
- 『中国語文法初探』王力原著 田中清一郎訳 文求堂書店 一九三七・六 支那学翻訳叢書3
- 『方言詞例釈』伝朝陽編 北京・通俗読物出版社 一九五七・七
- 『方言注商』呉予天著 上海・商務印書館 一九三六・一一 国学小叢書
- 『現代中日辞典』香坂順一・太田辰夫著 光生館 一九六二・三 再版
- 『最新日中常用字典』原田稔著 大安 一九六〇・二

以上二十数点を数える。専門の漢詩研究の文献が大部を占める中で、担当科目の講義資料、工具として参照していたことが分かる。音韻学、文学、中国語教材、辞書類など当時の中国語学、中国語教育の水準のなかでの位置づけは性急には論じかねるが、ほぼ基本的な質を維持していたと思われる。今でこそ、ほぼ入手が可能な隣国の書籍も当時としてはかなり入手困難なものがあったことが想像されるが、中国語教材では倉石武四郎の編集、また北京大学の教科書を用いていたことは中国語教育への積極的な関心が窺われる。

これまで高橋和巳の評論家として、また中国文学研究者としての力量については各方面からの考察があるが、中国語学については管見のかぎり、接したことがない。むしろ、彼の専門は六朝文学であるが、その一方で中国語学への関心についても興味もたれる。日本近代文学館の所蔵する高橋和巳文献目録には次の資料が遺されている。前掲講義科目の中国語学特殊講義のための講義ノートの一部と思われる。⁷⁾

- (1) 中国語学概説 十七枚一部鉛筆書き 立命館大学講師時代の講義ノート(昭和三五年)(高橋和巳特別資料70484)
- (2) 中国現代語文の諸問題 十四枚一部鉛筆書き 中国語学特殊講義ノート(高橋和巳特別資料70483)

専任講師になる一年前には中国語学のための担当であった。実は非常勤講師の就任時から中国文学の講義担当を望んでいたが叶わず、専任講師に



図(6)

高橋和巳「中国現代語文の諸問題」手書き
草稿17枚の本文一頁目。原稿B4コクヨ原
稿用紙(日本近代文学館所蔵)

なつてはじめてその希望が達成された。(1)は原稿用紙の一枚目に「一九六〇年度立命館大学文学部講義ノート」とペン書きされている。物理学の研究対象、心理学の研究対象と心理的現象の営みの比較から説き起こし、語学の「学」の本質から説き起こしているのは、彼の宇宙論的言語観が垣間見えるのだが、言語活動を客観的実在として把握しようとした努力が読み取れる。また、(2)は副題として「文体変革と文学変革」と題され、清末民国初、五四期にいたる梁啓超の言語観・文学思想、陳独秀、胡適らの文学革命に言及し、権力闘争の中での消長を意義付けようとしている。さらに魯迅の反権力急進主義に至る射程には竹内好『魯迅』(二九四四)に影響を受けた背景が記されている。それぞれ原稿は一部の鉛筆書きをふくめ彼独特の崩し字によってほとんどが判読困難なものだが、それでも原稿用紙の各所に書き込まれたメモ書き、注記には言語と文学の接点、相克を希求しようとした気概が汲みとられる。そして何よりも「講義ノート」として原稿用紙に向かった清冽な姿勢が胸を打つ(図(6))。学問研究に向かう崇高なまでの態度の原点が見出される。現象学、修辞学に関する記述が多くを占め、その一方で(1)には「聞一多の詩と額坤」、さらに馬建忠の「馬氏文通」への言及など、論旨記述の拡散が見られるが、言語と文学の大局を遠望し、表現者の態度に彼の関心があったためかとも思われる。総体的な把握が志向され、個々の言語現象、文法現象の分析、記述はどちらかといえば希薄であった。文学研究のための言語、修辞学の本質をもとめる営為を基調としていたことが確認される。

なお、高橋和巳の中国語力は実際に中国人母語話者との接触があったかどうかという点も含めて想像の域を出ないが、生涯に一度だけ中国を訪問している。立命館大学講師を辞職し、明治大学文学部就教授として在籍中、一九六七年四月に朝日新聞「朝日ジャーナル」の特派員として文化大革命最中の中国を二週間訪問している。三六歳の時である。帰国後は同志に見聞記を連載、のちに『新しき長城』に収められた。おそらく本場の中国語を現地で体験したときの感動は想像にあまりある。同年六月に明治大学を辞職、母校の京都大学文学部助教授として招聘されるが、この訪中が多大な影を落としたことが推察される。

高橋文学の第一充実期

当時立命館文学文学部の所帯は大きく、文学部紀要『立命館文学』は同人文学会が編輯に当たっていたが、編集担当者になると「思想の動向」というコラムを担当するようになった。現代思想の状況を多方面から論じる批評欄で、ここにも高橋和巳はいかなくその博学ぶりを発揮することになる。高橋が担当した「思想の動向」は上記『文学の責任』に収められたほかにも次のような題目で『立命館文学』一九六四年一・二月号に二回連載されている。⁹⁾「最近の日本文壇における「政治と文学」論について」と題された論考は朝日新聞に掲載された「政治と文学」論のいわば続編ないし詳細な彼の文学論が示されている。

このほか、立命館大学在職時に架かれた主要評論には次のものがある。なお小説は六三年に架かれた「散華」のみであり、その他の時間は一九六五に上梓される『憂鬱なる党派』、また六六年発表の長篇『邪宗門』の執筆に集中していたためである。

「戦後文学私論」『文藝』一九六三年七月号

「苦しむ才能——井上光晴論」『新日本文学』一九六三年九月号

「失明の階層——中間階級論」『中央公論』一九六三年十月号

「孤立無援の思想」『世代』一九六三年一一一—号

「日常への回帰」『文学』一九六三年十一月号

「仮面の美学——三島由紀夫」『文藝』一九六三年十二月号

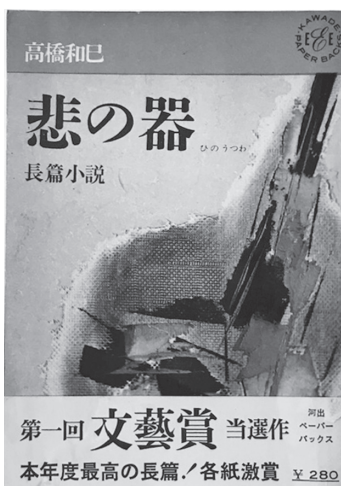
「京都の文学青年達」『新潮』一九六四年八月号

「戦争文学序説」『展望』一九六四年十二月号

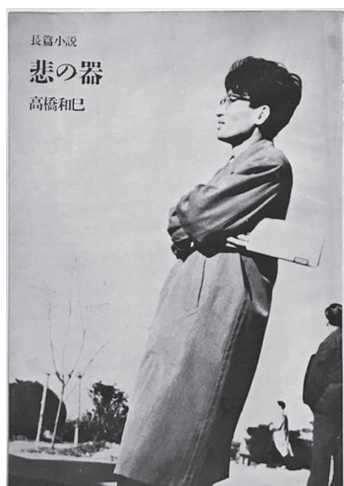
これらはのちの高橋和巳の評論活動の主要な部分をなしている。このほかにも小文は数多く書かれており、それらを収めた第二評論・エッセイ集『孤立無援の思想』が一九六七年に刊行されている。

以上、立命館大学専任講師在職時代の高橋和巳の仕事をたどってきたわけだが、エンジン全開のこの時期を第一充実期とし、以後を第二充実期、京都大学辞職以後病没までを晩年期とするのに躊躇いはあるまい。そして何といっても最大の成果は一九六二年、つまり講師三年目にして長篇小

説『悲の器』が第一回文藝賞を受賞したことであった。書き下ろし長編小説は同年十一月に河出書房から上梓されたが、高橋和巳の作者略歴がペーパーボックス(図(7))の裏表紙に書かれている。また、これも異例なことだが、中表紙には長身の高橋和巳の全身大の写真が使われている(図(8))。



図(7) ペーパーボックス『悲の器』の表紙(筆者所蔵)



図(8) 同書中表紙の写真(同)

昭和6年大阪に生れ、今宮中学一年のとき戦災にあい香川県に疎開。松江高校から京都大学文学部に入り、中国文学、六朝を専攻して29年に卒業、布施市の定時制高校に勤務しながら大学院博士課程を修了する。著書は『李商隠』『王士禎』(中国詩人選集)、長篇小説『捨子物語』。現在、立命館大学文学部専任講師。

また、「悲の器」を推す、として次の推薦の辞(選考委員の評)が載っている。こうした体裁も現代ではあまりとかほほとんど考えられないことであった。いかに大きな期待が寄せられていたかがわかる。

寺田透氏評「インテリを主人公にした小説は沢山あっても、その専門の畑での苦勞をじかに扱った朱説はなかった。この作品は、その欠陥を見事に克服している」

中村慎一郎氏評「日本の小説の考え方はぎろんを嫌がり、議論は小説ではないという非常に低い常識がある。そういう点をぶち壊している点で、この作品はいいと思う」

野間宏氏評「明治以来の日本が戦争に踏み込み、敗戦から戦後に至るインテリゲンチヤの全体的な姿を根底に真正面から描き出そうとしたすぐれた長編である」

植谷雄高氏評「簡潔な文体と重厚なリズムに感心した。長篇を書く以上、これだけの市井と準備と勉強がなければ書いてはいけないことを、この作品がしめしている」

福田恒存氏評「これは大げさに言うところ「罪と罰」だ。常識の世界に挑戦している。しかも、かなり高い調子で貫いている。最後に刀折れ矢尽きた感じはするが……」

帯文には「第一回文藝賞当選作 本年度採光の長篇! 各紙激賞」とある。また表紙見返りには、「作者のことば」として、次のように書かれている。こうした体裁も文芸書には異例のことで、高橋和巳のストイックな創作への〈志〉が十分にうかがわれる一文であろう。

多忙のニヒリズムというのが世の中にはあります。それぞれの仕事に勤勉で誠実で、それゆえに日々忙しく、その多忙さのなかに自分を見失うことを言います。しかし私たちは一日にたとえ僅かな時間でも、定形化された日常をはなれ、自分自身と対面し、さらに全世界を相手どってさまざまな疑問を発してみることがあります。この物語が、私たちに許された僅かな自律的時間の、各人の思弁の一つの素材とし得T役立てば幸いです。

一九六二年に文藝賞を受賞した高橋和巳は、翌六三年八月号の『文藝』に短篇小説「散華」を発表した。『悲の器』後の最初の作品である。この作品は自らを長篇志向の作家であるとしていた高橋が、「戦争および戦争中の精神の問題を、世代論的に強調し、通じ合わない不可能として押し出す」のではなく、「むしろ断絶したものとして論じられがちなものに、何らかのつらなりを見出」すために描いたものであった(東京新聞昭和三八年八月十七、十八日掲載)。「散華の世代―埴谷雄高氏へ―」。

この「散華」より一カ月前に発表された「戦後文学私論」(『文藝』七月号)のなかで、高橋は「私は自らの課題として、あの〈散華の精神〉とは何であったかを、あの〈死の哲学〉は何であったかを、日本の近代精神がなくなりゆくべき必然性をもった一つの歴史として、そしてまた一つの確かな哲学として、究明せねばならぬ」と論じたことを考えれば、「散華」はこの評論と対をなし、また照合されながら評価されてきた。「散華」は中津に象徴される戦前戦中の日本浪漫派的散華の思想と大家に象徴される戦後自由主義思想の対立として見られがちであるが、登場人物を分析したものが少なかったことは一つの大きな見落としであった。高橋の提起した問題に、文学者も含め、歴史学者も答えようとしなかった。ただ、両世代を代表する作中人物の一種、戯画的な対立の構図として読み取ることしかできなかったのである。

高橋が終生、戦争体験、戦争文学を念頭に置き、戦後文学の正統的継承者たらんとした背景には、時代に相応に敏感であったことが推察される。ちなみに、『悲の器』の発表された一九六二年には島尾敏雄『出発は遂に訪れず』が刊行され(初版本が所蔵目録にある)、さらに翌年六三年に『散華』が書かれた年の八月には政府主催の第一回国戦没者追悼式典が日比谷公会堂(一九六五年以降は日本武道館)で挙行されている。視野狭窄を忌避した高橋和巳にとって見れば、こうした出来事は戦後日本のありように何らかのメッセージを發せずにはおかなかったであろう。

おわりに

約五年間の立命館大学講師時代にも当然ながら京都大学人文科学研究所をはじめ京大教員メンバーとの接触・交流、共同研究にいそんでいたことも高橋和巳の思想形成に大きな影響を与えていたが、小文では煩雑さを避けるため割愛した。

三十歳にして大学の専任講師になることはその実力もさることながら幸運なことであった。恵まれた環境のなかでの研鑽の途上であったが、高橋和巳の中央文壇への志向は抑えがたく、五年の在職の後に唐木順三らの熱心な呼びかけもあつて明治大学文学部助教授として赴任することになる。明治大学での職歴は僅か一年にすぎず、その後、吉川幸次郎教授の後継者として京都大学に戻るわけであるが、すべては彼のたえざる向上心、上昇志向に支えられてのことであった。

歴史には、否、それを構成する個々人の営み、人生の歩みにおいても、「もし」という過去と現実との断層と確執、それに付随する述懐、感懐が湧き起るのを禁じ得ないが、よく言われるように、古巣の京都大学に戻らなければ、いやそもそも明治大学に赴任せずに立命館大学に在職していたならば、高橋和巳の文学は長くその豊饒な営為をつづけたのでは、という思いが残る。

筆者にとって思い出深い数枚の写真がある。『高橋和巳追悼特集号』の冒頭グラビアにも、作品集や全集にも収録された写真である。はじめて訪れた中国は文革の真つ最中であつた。昭和四二年四月、北京市革命委員会樹立の日、北京の街角に彼の姿がある。紅衛兵に囲まれ、また別の写真では通訳の女性であろうか、横に立って毛沢東語録であろう、小冊子の頁をのぞいている長瘦身の高橋がいる。いまだ肌寒い北京ではコートや羽織つている。プレゼントされたと思われる解放軍の帽子をかぶり、襟には毛沢東のバッジをつけている。その場で彼は紅衛兵とどんな会話を中国語で交わしたのだろうか。後にも先にも初めて中国で本場の中国語に接し、どんな感慨を懐いたのか、と想像する。同席した若い女性通訳、あどけない紅衛兵は今、どこで何をしているのだろうか。あの時代、今の中国を誰が想像し、予想しえたであろうか。

人の一生は自らも未知数である。重戦車のように六十年代を疾走するには、やはり曠野、荒野が必要だったのかもしれない。なお、いずれも短期間に終わった明治大学、京都大学における高橋和巳の足跡、授業担当科目などの解明整理が引き続き俟たれるところである。そしてそこには、かならずや立命館大学講師時代の研鑽が継承されていたにちがいない。

高橋和巳の文体については好意的な批評は皆無と言つてよいほど、その通俗性、語彙表現性の破綻などが指摘されているが、これは中国文学の専門性と関係があるかもしれない。また、ストイックな態度、精神の由来は、戦争体験の投影でもあり、次のような精神的な志向性が濃厚に顕われていたからともいえよう。「墮落」の「あとがき」に綴られた言辭こそが彼の最大の問いであった。

—過去の蹉跌を切断することによって現在の苟安をむさぼろうとするのが戦後を主導した日本人の態度であった。だが私はその態度を嫌悪する。昭和の精神史を内部から文学を通して反省し批判するという私自身の営為は激動の現代に対する私の自立への姿勢でもある。

高橋和巳にとって三九歳という短い生涯、十年に満たない学究生活、創作の期間において、立命館大学こそは最長の在職期間であり、また最も精力的に研究と創作に勤しんだ清冽な時代ではなかっただろうか。それはまた戦後が新たな高度経済成長期にさしかかり、あの悪夢のような戦争、戦後が忘れ去られようとしていた時代にあつて、懸命に真摯に時代を繋ぎ止めようと刻苦奮闘した充実の青春であつた。そこには常に垣間見た、生涯にわたる修羅の世界、順逆無二の生き方があつた。

高橋和巳は文学を全方位的に掌握し、文学を生きるための防波堤となし、常にその本質を志向した人であつた。奇しくも第一回文藝賞受賞の表を述べた福田恒存氏が述べた「最後は刀折れ矢尽きた感」が現実のものとなり、その志半ばにして斃れたが、彼の目指した、あるいは問いたださうとした戦後責任、人間の絆に対して、以後の日本人は何ら答えを要していない。それどころか、回避してしまつてい

今日、高橋和巳を知る若い世代はますます少なくなつてい

るが、彼が研鑽した宝石のような日々を長く記念して小文を終えたい。¹⁰⁾

附記と謝辞

本年二〇二一年、高橋和巳没後五十年を迎え、彼の文学的出発となつた立命館大学時代の足跡をたどり、その足跡を顕彰した。私事にわたるが、高橋和巳の死は前年晩秋の三島由紀夫の死とともに、筆者の大学時代に遭遇した大きな出来事であつた。大学を退職するにあたり、ここに深い感慨を込めて一文とした。いくつかの点については太田代志朗氏から貴重なご教示を得たことに感謝申し上げます。願わくば、若い世代に読み継がれてゆかんことを。なお、本文中の日本近代文学館所蔵の特別資料の写像掲載については同館関係者のご厚意による。記して感謝申しあげる。

注

- (1) 立命館時代の高橋和巳については高橋和巳論の各書に断片的に綴られているが、太田代志朗氏による論考が最も詳しい。当時、中国文学専攻の主任教授であつた白川静は次のように述べている。「高橋和巳君は、かつて私が吉川幸次郎博士に請うて、私の専攻に迎えた人である。学術にすぐれた才能をもつ人であつたが、作家的な衝動を抑えきれず、「邪宗門」執筆中に辞職された」(「私の履歴書」日本経済新聞、一九九九・一二・二一)。立命館大学を辞職するにあつては東京を主戦場とする中央文壇への希求と同時に、おそらくは全身全霊を投じた「邪宗門」の執筆の成果によって作家的自立を確信したことが大きいと思われる。

- (2) 高橋和巳の文壇的出発前を決定した初期の思想を凝縮したエッセイ集。「帯」には「高橋和巳エッセイ集 現代文学が担うべき責任を問いみずからの存在と文学の原点に肉薄する野心的エッセイ六〇〇枚」とある。冒頭論文「文学の責任」において高橋は「文学は人間の生に対して答えではなく真摯な問いを突きつけるものであるがゆえに、最も大きく人を揺り動かす。こうした、人間の根源的な認識論操作であるゆえに、文学は、人間の精神にたいして、最も責任がある」と主張する。この高橋の文学概念・理論の出発点については藤村耕治(二〇一三)のすぐれた考察がある。なお、一九九五年に講談社文芸文庫に『新編 文学の責任』(川西政明解説)として編まれた(図③)。ただし、収録内容は大幅に変更した。『高橋和巳全集』第一巻・第二巻(一九七八)を底本とし、表題になっている論文を第1部、これにその後発表された埴谷雄高論・竹内好論・武田泰淳論・中島敦「山月記」論・魯迅論を第2部とする。コンパクトなアンソロジーに改編されたものの、この時期における文学観とその形成がつかみにくくなったとの印象がある。
- (3) それだけにこれら諸論考の精確な検証は、以後の作品群との相関を再考する上で重要な作業となる。例えば、「表現者の態度Ⅰ・Ⅱ」については、近年再評価した研究として平井昌司「高橋和巳「表現者の態度Ⅰ・Ⅱ」の検討」(『桃の会』高橋和巳特集号)所収、二〇一八・七 17-36)があり、長篇「憂鬱なる党派」の誕生にもふれている。なお、「表現者の態度Ⅲ」は草稿が高橋和巳特別資料に残されており、考証・公開が俟たれる。
- (4) 『中國文學報』は一九五四年十月に創刊された京都大学大学院文学研究科紀要で、次のように書評(共著)一本、学士論文、修士論文、博士論文の四本が掲載されている。二四歳から二八歳にかけての時期である。
- ・劉勰『文心雕龍』文学論の基礎概念の検討」第三冊(一九五五年十月)
 - ・書評・李長之『中國文學史略稿』・林庚『中國文學簡史』(荒井健・一海知義・清水茂・高橋和巳・村上哲見)第四冊(一九五六年四月)
 - ・「潘岳論」第七冊(一九五七年一〇月)
 - ・「陸機の伝記とその文学(上)」第十一冊(一九五九年一〇月)
 - ・「陸機の伝記とその文学(下)」第十二冊(一九六〇年四月)
- 以後、立命館大学時代から母校京都大学に戻るまで同誌に彼の中国文学論が掲載されることはなかった。
- (5) 役員名簿にはしばしば「高橋克巳」と記されている。その後も他誌でも「高橋和巳」などの誤記もたびたび見られる。
- (6) 朝日新聞一九六三年八月一六日付夕刊に掲載。後にこのエッセイは「文学者にみる視野狭窄」と改題され、単行本『孤立無援の思想』(河出書房新社、一九六九)におさめられた。
- (7) 日本近代文学館高橋和巳所蔵文献目録による。

- (8) このほか、立命館大学講師時代に、『悲の器』、『散華』がそれぞれ、岡田光治脚色・大山勝美演出、生田直親・大山勝美演出によるテレビドラマが一九六三年七月、一九六四年七月にTBS系列で放送されている。この社会的反響は小さくはなかった。
- (9) 『立命館文学』は創刊が一九四七年。編集は立命館研究所、立命館大学人文科学研究所を経て、現在は立命館大学人文学会。二〇〇四年からA4判に移行するまではA5判であった。隔月で刊行され、現在も在籍学生在職教員が会員となっている。
- (10) 立命館大学文学部文学科日本文学専攻の卒業論文題目には次のような高橋和巳論がある。参考までに記しておきたい。
昭和五二年度・「高橋和巳「捨子物語」を中心に——神と運命と幻想——」(大江吉秀)、平成八年度「高橋和巳「邪宗門」論——何がひのと救霊会を破滅させたか」(角田美樹)

参考文献(注記をのぞく。また主要なものに限った)

- 太田代志朗『高橋和巳序説 わが遙かなる日々の宴』林道舎 一九九八
- 太田代志朗・田中寛・鈴木比佐雄編『高橋和巳の文学と思想 その〈志〉と〈憂愁〉の彼方に』コールサク社 二〇一八
- 白川静、梅棹忠夫、梅原猛、中村元『知の越境者——私の履歴書』日経ビジネス人文庫 日本経済新聞社 二〇〇七
- 田中寛『曠野と殉教 新説高橋和巳論』新世紀人文学叢書(私家本) 二〇一九
- 中原章雄『小説家高橋和巳再読 ——ある研究室伝説の誕生——』『立命館文学』六〇六号 二〇〇八年三月 九三七—九四五頁
- 日本近代文学館所蔵資料目録28『高橋和巳文庫目録』財団法人日本近代文学館 二〇〇二・一一
- 橋本安央『高橋和巳 棄子の風景』試論社 二〇〇七
- 埴谷雄高・吉川幸次郎『高橋和巳全集』河出書房新社 一九七八—一九八〇
- 藤村耕治『高橋和巳の〈文学〉概念…「文学の責任」をめぐる』『日本文学誌要』85巻 法政大学国文学会 二〇一三 一五一—二五頁